

同志社大学大学院総合政策科学研究科 総合政策科学専攻図書館情報学コースでの2年間

今野 創 祐

筆者は2015年4月より新たに同志社大学に設置された大学院総合政策科学研究科総合政策科学専攻図書館情報学コース（以下「図書館情報学コース」とする）⁽¹⁾に入学した。本稿では、筆者がこのコースに入学し、修士論文を提出するまでの2年間について紹介する。

1. 大学院に入学するまで

まず簡単に筆者の自己紹介をしたいが、筆者は2011年9月から現在（2017年2月）まで京都大学において図書系職員として勤務し、現在は附属図書館宇治分館にて直接的な利用者サービスや雑誌受入をメインとする業務に携わっている。筆者はそうした業務に従事する一方、天野敬太郎という人物の生涯に関わる研究を中心とする、図書館史の研究を独自におこなっており、その研究の結果を、関西文脈の会という図書館史の研究会⁽²⁾や、大学図書館問題研究会という組織の全国大会⁽³⁾で発表したりしていた。また、京都大学において、附属図書館准教授の北村由美先生が、図書系職員を対象として勤務時間外に研究の手法を指導するという企画「研究入門セミナー」が実施されたため、その企画に参加し、北村先生より研究のやり方や論文の執筆法について教えていただく、といった形で研究を進めていた。そうした中で、2014年の年末、或る図書館職員を中心とした集まりにおいて、翌年の4月に同志社大学にて図書館情報学コースが設置される予定であり、そのコースについてのガイダンスが近日中に実施されることを偶然に耳にした。その場で聞いた限りでは、社会人も勤務の傍ら通学が可能となるカリキュラムが組まれる予定である、とのことだったため、筆者は2014年12月14日に同志社大学鳥丸キャンパスにて実施された、図書館情報学コースの説明会に出席した。誰よりも早く到着した筆者に、図書館情報学コースの専任教員である原田隆史先生（以下、原田先生とする）と佐藤翔先生が温かく対応してくださったことを今でもよく覚えている。その説明会で私は、原田先生に対し、自身の研究したい内容は原田先生の研究内容とは違ったものだが指導していただけるのか、といった質問をぶつけたが、それに対し、誠意ある回答をしていただけたこともあり、私は入試への挑戦を決意した。当時の入試制度では、社会人である私は所属する組織の部長または人事権を有する上司の推薦状を提出すれば、面接試験のみを受験すれば良いとのことだったため⁽⁴⁾、当時、私が所属していた京都大学附属図書館の事務部長に推薦状を書いてもらい、受験に挑戦した。出願時には研究計画書を提出する必要があり、入学願書には、提出する前に指導を希望する教員に内容を確認してもらい、旨が書かれていたため、原田先生の指導を受けた後に出願し、受験をした。面接では自身の研究計画などについて質問をされ、緊張しつつも、なんとか受け答えをした記憶がある。合格発表の日には定時に職場を出て、出町柳駅からタクシーに乗って総合政策科学研究科の事務室へ行き、自分の受験番号を見つけて安堵した。

筆者が大学院に入学した目的は、主に以下の三つであった。まず、前述した、自身が行ってきた研究に対して指導をしてもらうこと。次に、非常勤講師として講義をされる多くの先生方を含めた当代一流の研究者や実務家の講義を受けることで図書館および図書館情報学について新たな知見を得ること。最後に、筆者は大学図書館で勤務し、日々、教員や大学院生の研究を支援する業務に携わっているが、自身のサービスの対象となる人々の実態について、自身も研究者となることによって理解を深めること。これらの目的が、修士論文を提出した現時点で達成されたかについては終章にて記述したい。

2. 入学後の生活

図書館情報学コースでは、修了するためには修士論文を提出して合格するとともに、30単位を取得せねばならなかった。私は2年目は修士論文の執筆に専念したかったため、2年目の必修科目である研究演習Ⅱ、研究演習Ⅲ（各2単位）以外の26単位を、1年目にとれるように時間割を構成した。その結果、私は春学期は火曜の6限、水曜の6・7限、木曜の6限の科目と土曜の集中講義1科目、秋学期は水曜の6・7限、金曜の6・7限の科目と土曜の集中講義2科目、さらに研究演習Ⅰと後述するフィールド・リサーチ・プログラムを履修登録し、春学期に10単位、秋学期に16単位を履修登録した。幸い、私が勤務していた職場は比較的業務の調整が可能で、定時に退勤することもできたため、これらの科目は全て単位を取得することができた。

これらの科目は全て、私にとっては論文などで名前をお見かけしたことしかない偉大な研究者の方々の授業を受ける貴重な機会であり、どの講義も有意義なものであったが、1年目の大学院での生活で特に印象に残っている講義は、導入科目である図書館情報学研究入門である。この科目は隔週で、グループワークと、自身の研究の進捗状況の報告を交互に繰り返すものであった。前者では、筆者の所属したグループは「京都府立図書館の評価を高める方法について考える」というテーマについて取り組み、様々な本を読んだり、講義時間外にも自主的に集合して議論を繰り返し、また、岐阜県にある市立中央図書館（ぎふメディアコスモス）をメンバーで見学に行ったりといった学習をした。結果的にはこのテーマに対し、満足できる答えを出すことはできなかったが、このテーマに取り組む中で「良い図書館とは何か」という、或る意味では図書館情報学においてもっとも本質的かつ重要であると思われる問いと真正面から向き合ったことは、筆者にとって有意義なことであった。後者では、院生全員が自身の研究の計画について発表し、教員や他の院生から意見を聞いたり、指導を受けたりするといった形で講義が進められた。こうした指導を通じて、筆者は自身の研究を客観視し、研究を進展させることができた。指導教員である原田先生からの指導はもちろん有意義なものであったが、図書館情報学コースにおいては、同級生である7人のうち6人が図書館での業務を経験した方々であったため、同級生の方々の図書館での業務経験に裏打ちされたアドバイスの数々も、筆者にとっては大いに参考となるものであった。

また、前述したフィールド・リサーチ・プログラムは、フィールド・リサーチ（さまざまな現場（フィールド）に身をおき、そこで生じている社会的事象を把握する研究手法）の過程を経験することを目的とした科目であり、筆者は、自身の所属する京都大学の附属図書館において、図書館情報学に関わる図書や雑誌がどのような選書の過程で受け入れられたのかを歴史的に研究するというテーマを設定し、これに取り組んだ。こちらも、十分な歴史的事象の解明には至らなかったが、こうした問題について取り組むことは、自身の所属する大学の図書館の歴史について振り返る良い機会となった。

これまで図書館情報学コースにおける講義について書いてきたが、当然ながら大学院での学習や研究は、与えられたカリキュラムや課題をこなすだけで完結するものではない。図書館情報学の研究や学習を進める上で重要なことは、学会誌（日本図書館情報学会誌、図書館界、Library and Information Science など）や、学会誌ではないものの、図書館に関する雑誌（図書館雑誌、情報管理、情報の科学と技術、カレントアウェアネスなど）を日常的に読むことや、学会に出席して他の研究者の研究に触れること、図書館系の勉強会に出席して図書館を取り巻く最新の事情について学習すること、図書館や図書館情報学に関わる専門書や図書館情報学に関する修士論文や博士論文で公開されているものを読むこと、といった自主的な学習活動を日常的に継続することであると考える、時間の許す限り、これらに取り組んだ。

修士1年目の秋には、ノートルダム女子大学にて開催された日本図書館情報学会の春季研究集会に出席して研究発表を拝聴した。また、修士1年の終わりの3月に、原田先生が同志社大学の司書課程の非常勤講師の方々を集めてくださり、その前で発表をさせていただく機会を与

えていただいたため、筆者もその時点での研究の成果を発表した。その際、発表を聞いていただいた先生方からは様々なご意見をいただいたが、それらは研究を進展させる上で、大いに役立った。また、筑波大学教授の逸村裕先生のゼミとの合同合宿も春と夏の年二回実施され、ここでも自身の研究を発表し、逸村ゼミの皆様（OBの方々含む）から忌憚のないご意見をいただいた。これらのご意見も、自身の研究を見なおすきっかけとなった。

修士2年に進学し、興味のあるいくつかの講義は聴講したものの、基本的には筆者の勤務時間外の生活は修士論文完成に向けた研究が中心となった。同志社大学の今出川図書館には、古い図書館関係の雑誌など多くの貴重な資料が所蔵されており、また、大学院生は一年間に1000枚まで学生証で無料コピーが可能だったため、図書館は大いに活用した。筆者は簡単にまとめれば、戦前の日本の目録規則における図書館用語が、どのように欧米の目録規則における図書館用語を翻訳・受容して形成されてきたかの歴史的研究を行っていたが、原田先生から学会での発表を勧められ、修士2年の春に、白百合女子大学にて開催された日本図書館情報学会の春季研究集会にて研究発表を行い⁽⁵⁾、来場の方々から多くの意見をいただいた。また、関西文脈の会においても、研究の状況について発表した⁽⁶⁾。その間、原田先生からは個別指導を受け続け、また、大学院の同級生および後輩の前での中間発表の機会も与えられ、修士論文は徐々に完成へと近づいていった。年末の追い込みの時期には、原田先生に何度も修士論文をチェックしていただき、書き直しを続け、郵送での提出の締切日である2017年1月4日に、無事、修士論文を提出することができた。

3. 大学院生活を振り返って

本稿の執筆時点で筆者は修士学位論文審査会に向けてのプレゼンテーション資料の作成中であり、大学院生活を終えたわけではないが、入学から修士論文提出までの2年を振り返って、前述した三つの大学院に入学した目的が達成できたかを確認したい。

まず、自身の研究を深めることについては、原田先生をはじめとした多くの先生方からご指導をいただき、学会発表を経て修士論文の完成にまで至ったことで、一つの成果を得たと思う。次に、教員の先生方の講義は、いずれも私にとっては大いに満足できる内容であった。いくつか例を挙げると、逸村裕先生と佐藤翔先生による大学図書館についての講義は、自身の日常業務と直接的に関わる要素が多かった。また、桂まに子先生の講義では、自身の所属する図書館における新たな直接的利用者サービスのあり方について考えることとなり、この講義での最終レポートは、職場における業務上の提言にもつながるものとなった。最後に、研究者の生活実態への理解促進についてであるが、理系の研究者の生活についてはまた文系の研究者の生活とは違ったものであろうことは推測できるが、少なくとも文系の研究者の研究のあり方については、自身の大学院での経験を通じて、身を以て実感できたように思う。

最後に、私の2年間の研究生生活を全面的に支えてくださった、原田隆史先生、佐藤翔先生、図書館情報学コースの同級生の皆様、同志社大学の職員（特に大学院総合政策科学研究科事務室、今出川図書館）の皆様、そして職場の同僚の皆様に感謝の思いを記して、この体験談を終わりたいと思う。

ありがとうございました。

注

- (1) このコースの詳細については、原田隆史、佐藤翔、同志社大学大学院総合政策科学研究科総合政策科学専攻図書館情報学コース、同志社大学図書館学年報、2015、vol.40、p.65-71、を参考にしていただきたい。
- (2) <http://toshokanshi-w.blogspot.jp/search?updated-max=2014-10-09T22:37:00%2B09:00&max-results=8&reverse-paginate=true> (2017-02-05閲覧)
- (3) <https://sites.google.com/site/dtk2014yamagata/> (2017-02-05閲覧)
- (4) 入試制度はその後変更されているため、最新の入試制度は、図書館情報学コースのウェブサイトの「入

試情報」<http://www.slis.doshisha.ac.jp/grad/admission/index.html> (2017-02-05閲覧) にて確認をしていただきたい。

(5) <http://www.jslis.jp/conference/2016Spring.html> (2017-02-05閲覧)

(6) <http://toshokanshi-w.blogspot.jp/2016/07/312016730.html> (2017-02-05閲覧)